

要旨

目的：統合医療は、近代西洋医学を前提とし、伝統医学、相補・代替医療、経験的な伝統・民族医学や民間療法などを組み合わせた医療と定義されるが、効果がないまたはエビデンスが不十分なまま活用されている療法も多くある。本研究は、妊婦が病院や治療院で治療として受けた統合医療に加え、セルフケアとして活用している統合医療の実態について明らかにすることを目的とした。

方法：本研究は無記名自己記入式質問紙を用いた量的記述的研究である。妊娠 35 週以降の妊婦に質問紙または Web 調査にて回答を求めた。質問紙は、対象者の特性、セルフケアとしての統合医療の活用状況、医師や専門家による施術・処方、認知度・興味に関する質問項目で構成した。分析は記述統計量を算出し、各療法の活用の有無と対象者の特性の関係についてクロス集計と χ^2 検定を実施した。また、活用数の平均値や認知度・興味と特性の関係について t 検定、分散分析を実施した。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(17-A068)。

結果：5 施設 241 名の妊婦に質問紙を配布し、187 名(有効回収率 77.6%)を対象とした。妊娠期に治療として統合医療の療法を受けていた者は 51 名(27.3%)であり、最も多かったのは整体(9.7%)であった。セルフケアとして 1 種類以上の療法を活用していた者は 141 名(75.4%)であり、そのうち活用について医療者に相談していた者は 27.0%であった。活用数の平均値は 1.98(SD=1.80, median=2.00)であった。活用者が多かったのは、サプリメント摂取 89 名(47.6%)、ウォーキング 60 名(32.1%)、ハーブ 38 名(20.3%)、灸 32 名(17.1%)、ヨガ 32 名(17.1%)であった。セルフケアとして活用していた妊婦の特徴は、学歴が高い($p<0.001$)、出産歴がない($p=0.042$)、現在気を付けていることがある($p<0.001$)、今後気を付けたいことがある($p=0.002$)であった。情報源で最も多かったのは「友人・家族」42 名であり、医療者が情報源であった割合は、「医師」8 名、「助産師」23 名、「分娩施設関連(医師・助産師を除く)」31 名であった。活用の目的は「体の不調・マイナートラブルの改善」(31.4%)が最も多かった。興味のある療法は、マッサージ 99 名(52.9%)、ヨガ 99 名(52.9%)、アロマセラピー 89 名(47.6%)の順であった。

結論：統合医療に関して妊婦が活用している療法や情報源・目的等の実態が明らかとなり、エビデンスギャップの存在が推測された。今後、分娩施設における各療法の情報提供の内容や方法等の調査を行い、安全かつ効果的な活用のための情報提供・指導を目的とした医療者への教育を検討・実践していく必要性が示唆された。